

Title	シンデレラ：玉の輿物語を比較文学的に考える
Author(s)	堀江, 珠喜
Editor(s)	
Citation	女性学講演会. 19 (2), p.1-15
Issue Date	2016-03
URL	http://hdl.handle.net/10466/14979
Rights	

第1回講演

シンデレラ——玉の輿物語を比較文学的に考える

堀江 珠喜

『シンデレラ』、すなわち広義的には玉の輿物語、あるいは幸運な格差結婚の話は古今東西に存在する。とりわけ『シンデレラ』は人気があり、異説やパロディも多い。今回は、シャルル・ペローが記した『サンドリヨン』をもとに、比較文学的に玉の輿物語を検討し、現代のシンデレラという女性の生き方を考えたいのである。

《ガラスの靴》

まずペローがこの作品を書くにあたって、古くから伝わる話を収集した際、本来は vair（リスの毛皮）であったのを、同音の verre（ガラス）と間違えたとの説がある。確かにガラスの靴は現実的ではない。だが、だからこそ、読者は美しいファンタジー世界に浸れるのではあるまいか。もし、シンデレラの靴がガラスでなければ、この物語の魅力が3割減となると思うのは私だけだろうか。

事実、ペローから約2世紀後にグリム兄弟が、この話を書いたときには、銀の靴と金の靴に替わった。だが、これ以降も、シンデレラについて語られるとき、やはりガラスの靴がその必須アイテムであり続けている。もちろん舞台上で上演するときに、ガラスの靴は履けない。そこで金の靴が使用されただろうし、ロッシェニのオペラ『シンデレラ』では、靴ではなく腕輪の持ち主を探すことになる。だがそれでも世間でガラスの靴のイメージが忘れられることはない。

《なぜ父は再婚したのか?》

ロッシーニのオペラでは、コミカルな雰囲気強調のためか、継母ではなく男爵位をもつ継父が登場する。だが、それでは再婚の辻褄が合わないのだ。そもそもシンデレラの実父が、2人の娘を持つ中年女性と結婚したのは、彼女の財産のためではなかったか。彼女自身が資産家の娘か、前の夫が資産家で、その死後、遺産を受け取ったのだろう。暮らしには困らなかったが、2人の娘のより良き縁談を考えると、シンデレラの父の地位（王家の舞踏会に招かれる家柄）に魅せられたのだ。娘の結婚相手を見つけるのは、近年までは母親の義務でもあった。

ちなみにジョーン・コリンズ（『ピラミッド』や『ダイナスティ』の悪女役で有名なユダヤ系英国女優）は自伝で girl が必要なものについて次のような言葉を紹介している。まず生まれてから18歳までは good parents、18～35歳は good looks、35～55歳は good personality、そして55歳以上は good cash なのだそう。後半はともかくとして、良縁を考えた場合、「お育ち」と「容姿」が重要なことは明らかだ。シンデレラと2人の姉の年齢は16～20歳くらいと想定できる。継母が自分の娘たちのために、まずは good parents の条件を揃えようとする努力は、まさに愛情ゆえなのだ。

一方、シンデレラの父は名門の当主ではあるが、経済的には困窮しており、このままでは体面が保てなかったと考えられる。シンデレラの亡き母親の持参金も大した額ではなかったか、あるいはすでに使われてしまったのだろう。こう考えると、この結婚はお互いの利害が一致する、至極当然の結果だったのである。

もちろん継母の結婚目的が、2人の娘の良き縁談のためである以上、そのライバルと思しき相手を排除する行動に出るのは当たり前だ。より美しく若いシンデレラが存在が邪魔であるばかりか、父親にはシンデレラの持参金を用意できそうにないのだから、自分の財産があてにされているようにも思われよう。そもそも良縁、すなわちランク上の男性との結婚は、競争率が高いのだから、まずは家庭内の強豪を潰しておくべきなのである。

ちなみにマーティン・デイリー&マーゴ・ウィルソン著『シンデレラがいじめられるほんとうの理由』には、民話で意地悪な継父より継母が多く登場する事情について、興味深い説明がある。まず、昔は出産で母が死に、継母という存在は珍しくなかったこと。さらに子供に話を聞かせるのが大抵、母親だったので、自分が死んで継母が来たら大変な事態になるから（母である）自分を大切にしようとするとのメッセージが込められているというのである。私としては、3つめの理由として、物語の作者が男性であったであろうことを挙げたい。概して男性は、不都合な事態の責任を女性に押し付けようとするのだ。シンデレラの場合も、彼女の待遇について、実父は改善しようとはしなかったではないか。

《Miss は Mrs よりランク下?》

ではなぜ、それほどまでに継母は2人の娘の縁談に熱心なのか。それはつい最近（私の個人的経験では80年代後半）まで、西洋ではカップル社会で、女性1人ではパーティはもちろん観劇などにも行きにくい雰囲気だった。ましてや、民話世界では（そしておそらく20世紀前半まで）、女性は結婚によりやっと1人前と見做され（とはいえそれはあくまで夫の庇護のもとでの話なのだが）、夫のいない女性は、社会において存在がないのも同然だったのだ。（高齢未婚女性や未亡人が嫌われ、魔女との烙印を押される可能性が高かった件については、すでに2014年度の同誌において述べた通りである。）

現代は、女性の社会進出により、結婚よりも仕事を優先させるキャリア独身が増えたので、事情はかなり異なってはきた。とはいえ、依然として「シンデレラ」という名前は、呪文のように人々の心をとらえている。

《シンデレラ・コンプレックス》

さて社会事情が変化し、「シンデレラ」という言葉の使い方にも多様性が見られるようになった。1981年にアメリカでコレット・ダウリング著

『シンデレラ・コンプレックス』が出版された。副題が *Women's Hidden Fear of Independence*、つまり女性が密かに抱く自立への恐れ、である。

フェミニズムやアイデンティティーといったことを理解できない男性中心の日本社会では、当時、「シンデレラ・コンプレックス」を女性の結婚願望論と受け止めたように思われる。だが、本当は、才能ある女性が、社会的チャレンジを避け、自立せずに庇護されたいと願うのは、そのように依存的に生きるのが女らしいと教え込まれたからだというのが、この本の要旨であった。日本とは異なり、やたらに「庇護」という観念がでてくるのは、条件反射的なレディ・ファースト文化が浸透する欧米の社会ならではの、ではあるまいか。

まあ理解の程度はさておき、このようなフェミニズム系の本が当時の日本社会でも話題になった原因は、タイトルに「シンデレラ」が使われていたためではあるまいか。どうも、日本人は西洋人に比べ、異常にこの言葉に弱いように思われる。理由はわからないが、とにかく好きなのだ。例を挙げよう。

1. 毎日放送「ちちんぷいぷい」(2015年秋季時点)で「昨夜のシンデレラ」として、前夜の8時過ぎに飲食後と思しき機嫌の良さそうな中年男性歩行者にインタビューする企画がある。まったくシンデレラらしい人物もアイテムも登場しないのだが、それでもこのタイトルで押し通す放送局側に視聴率稼ぎの姿勢がうかがえよう。
2. シンデレラ太秋(たいしゅう)柿 1個5千円。紫外線を通すハウスの中で大事に育てられたとか。シンデレラ自身は継母たちに苛められ、決して大切に育てられたわけではないのだが、その夢の成就にあやかったネーミングなのだろう。
3. シンデレラ・サイズ(試着して直す必要のないぴったりのサイズのときに、店員が客に言う褒め言葉)。

「シンデレラ」という言葉には、玉の輿サクセスストーリーとして一般大衆を惹きつける力があるのだろう。従って、たとえ結婚に関係なくても、タイトルにその名を入れて読者にアピールしようとする本も多く、この傾向が近年高まっていることは、国立国会図書館のサイトを検索すれば明らかである。

ましてや格差結婚のハッピーエンドを「お約束」にしているハーレクインの物語には、「シンデレラ」をタイトルに用いるきらいがあって当然と思われるが、なかには邦訳でのみその名が使われていることが少なくないのだ。たとえば2014年でハーレクインが日本国内で出版した恋愛物語は708冊で、そのうち21冊の邦題に「シンデレラ」の名が含まれているが、原題に「シンデレラ」は見当たらない。

2014年9月には記念すべき3000号が『シンデレラの純潔』として出された。この原題は *The Dimitrakos Proposition* (ディミトラコスの誘い) である。イタリアやギリシアの富豪を登場させることの多いハーレクインなので、裕福なディミトラコスというギリシア男性が貧しいヒロインと結ばれるとの話は、タイトルからすぐに想像がつく。けれども日本では、やはり「シンデレラ」との名前を入れたほうが、より購買意欲を高めると考えられたのかもしれない。

2013年には17冊が「シンデレラ」の入った邦題で出版され、そのうち3冊の原題にこの名が使われているが、おしなべて、原題「シンデレラ」は邦題「シンデレラ」の4～5%である。とりわけ日本においては「シンデレラ」は売り上げの期待できる魔法の名前というわけだ。

《「玉の輿」人気を検証する》

『シンデレラ』でもっとも読者が心を躍らせるのは、彼女の「変身」ではあるまいか。結婚によるハッピーエンド物語は多いが、貧しく汚い身なりの下女も同然だったシンデレラが美しいプリンセスに変身し、ゴージャスな馬車に乗って王家の舞踏会に行き、王子様と踊るという「変身」は、まさに多くの女性にとって素敵な夢物語なのだ。同様に、『ピグマリオン』

あるいは『マイ・フェア・レディ』の人气が衰えないのも、貧しい花売り娘が貴婦人に「変身」するためだ。そう、やはりゴールはゴージャスなレディへの「変身」であり、それを一挙に叶えてくれるのが、「王子様」との結婚というわけだ。

従って最高の玉の輿はロイヤルシンデレラたる「王妃」であり、将来の王妃の座を約束された皇太子妃になる結婚である。概して、女王や王女よりも、王妃や皇太子妃の人气が高い。それは、もちろん「妃」は「娘」とは異なり、容姿によっても選べるので社交界のファッションリーダーにふさわしい女性を娶ることができ、「スター」になりやすい。(ちなみに英国のアン王女の容姿については気の毒なジョークが存在するほどだ。)さらに、「妃」の出自によっては、人々がある種のシンデレラの要素を感じるからではあるまいか。

たとえばダイアナ妃の人气は、アン王女やマーガレット王女のそれよりも高く、ともすればエリザベス女王の人气をも凌いだのではあるまいか。それは英国国内にとどまらず、日本では1986年5月に『別冊女性セブン ダイアナ妃物語——愛のシンデレラストーリー』が発売されている。よく読めば、いかに彼女は勉強が苦手で、行儀も悪く、英国王室には相応しくないかがわかる。(たとえば、1981年、挙式後初めての公式行事に出席したおり、英国国歌が流れているにもかかわらず、ダイアナが夫に話しかけ、声を立てて笑い、女王に睨みつけられた逸話などを紹介しているのだ。)にもかかわらず、たいていの女性誌読者たちは、ダイアナの玉の輿物語とその夢のような暮らしを垣間見て、溜息をつき、彼女に憧れただろう。

ダイアナが結婚したとき、日本のマスコミが「シンデレラ」との言葉を頻繁に使うのに対し、伯爵家の令嬢だからこの言葉はおかしいとの反論もあった。だが、第一次世界大戦までは、王族は王族と結婚するのが普通であり、とくに将来の王妃や女王配は王族と決まっていた。従ってヨーロッパ中の王室がドイツの王子や王女を迎えていたのである。英国で1917年にジョージ5世が王室婚姻法を改正し、王族が王族でない英国人と結婚できるようにしたのは、対戦国の王族との婚姻が好ましくないと考えたか

らだ。

それでも、皇太子の結婚相手をすぐに王族でない自国民に求めることには、なんらかの抵抗があったのではあるまいか。ジョージ5世の長男エドワードが、なかなか結婚しなかったのは、そのような事情があったと思われる。本来なら、ドイツあたりの王女を連れてきていたはずなのだ。一方、王位に就く可能性の低い次男は気楽に、さっさとスコットランドの伯爵令嬢エリザベスと結婚した。

結局、長男は、エドワード8世となってまもなく、アメリカ人のシンプソン夫人との結婚のため、王座を捨て、次男がジョージ6世となり、結果的に、エリザベスが初めての、王族でなく伯爵家出身の王妃になったのである。だが、彼らの長女で将来の女王と決まっているエリザベスは、やはり王族のフィリップと結婚した。つまり、ダイアナは英国の王位継承権1位の人物と結婚した最初の非王族という意味では、十分に「シンデレラ」だったのである。

さて、王妃や皇太子妃あるいは王位継承権の上位にいるプリンスの結婚相手が、その国の生まれながらの王女よりも人気が高くなるのは、容姿で選べるので、社交界のファッションリーダー的存在になるからでもある。エドワード7世の妻でデンマークの王女、アレクサンドラは、英国国民に受け入れられ、夫の不倫に悩まされながらも、立派に皇太子妃や王妃の役目を果たした。

デンマークは英国に比べて格下の国だし、王族だったとはいえ、彼女の実家は王家にしては貧しかった。英国皇太子との結婚はちょっとした玉の輿だった。ちなみに彼女の妹は、ロシア皇太子と結婚した。適当な相手がドイツにいないときにはデンマークの王族が候補になったようだ。

だが逆に、王妃が不人気だと、かつては国の存亡の危機を招きかねなかった。というのも、彼女らは大抵、外国の王女だったので、革命時にマリー・アントワネットが「オーストリア女」と呼ばれ、ニコライ2世の妻が「ドイツ女」と呼ばれたように、国粋主義者からは目の仇にされる可能性も高かったのである。オーストリアの皇后でバイエルン出身のエリザベートは美しかったが、その評価は2分する。公務嫌いでも国も家族も顧みず、自

分の楽しみのために外国旅行ばかりしていたのだ。

彼女の一人息子ルドルフ皇太子はドイツ嫌いだったが、不倫相手の男爵令嬢マリーと心中してしまった。『うたかたの恋』で有名になった物語だ。国内でもドイツ嫌いとお親ドイツ派がいたので、皇太子の死は後者による暗殺説もある。結局は積もり積もった王室への不満が、ハプスブルク家の統治を終わらすことになったのだろう。そしてもしかしたら、「シンデレラ」の物語は、君主に対し、国外から妻を迎えず、自国のしかるべき女性と結婚して欲しいとの人民の願いも込められていたのかもしれない。

その意味でも、それだけでなくドイツ系の王室である英国の王、ジョージ5世が前述のように法律を改正したのは賢明であった。これによって英国王室で「シンデレラ」が公認されたのである。ダイアナは伯爵令嬢だが、その長男ウィリアムの妻、キャサリンは中産階級出身の英国人で、母親は労働者階級の出身ともいわれている。だが、ダイアナの悲劇で王室の支持率が落ちた時期に、キャサリンのシンデレラ物語は、英国王室にとっては願ってもない縁談だったに違いない。今の英国は、キャサリンがファッションリーダーになっている。エリザベス女王がミニスカートを批判したため、彼女が拒食症になったと報じられているが、英国といえども国民の人気という点では、もう王族出身者に頼れないのが現状なのだ。

《格差婚の悲劇》

かつては「貴賤結婚」(morganal marriage)という制度があった。妻が低い身分の場合、彼女も公には妻と認められず、子供に財産や家名を継ぐ権利がないのだ。ヘッセン家のアレクサンダーは妹 MARIA (ちなみに、この兄妹は母親の浮気相手の子供といわれている)の嫁ぎ先であるロシアの宮殿で侍女のユリアと1851年、恋に落ちて結婚するが、そのため、妻はプリンセスではなくバッテンベルク伯爵夫人を名乗らされる。また彼らの子供たちの姓もバッテンベルクとなった。

ただし、彼らの長男は英国のヴィクトリア女王に可愛がられ、彼女の孫娘と結婚し、その孫フィリップはエリザベス女王の夫である。第一次世界

大戦中、英国貴族となったバッテンベルクはマウントバッテンと改名させられたが、今のイギリス王家の名はウィンザー・マウントバッテンである。フィリップはギリシア王子だが、ギリシア王室は家名を持たないので、結婚に際し、尊敬する叔父ルイスの家名、マウントバッテンを用いることにしたのである。

このように、バッテンベルクの場合は、フィリップの叔父ルイスが79歳で暗殺されたという悲劇はあるものの、全体としては幸運だった。しかし、1900年、ハプスブルク家の皇太子フランツ・フェルディナントとボヘミアの伯爵令嬢ゾフィーとの結婚は、「貴賤結婚」とされ、彼女も生まれてくるであろう子供も皇族の身分は与えられないことになった。ウィーンの宮中でも、彼女は末席に座らされ、公式行事でも、夫から離され、皇族の女性たちの最後尾を一人で歩かされた。

フランツは少しでも妻に皇太子妃の気分を味合わせたいと、1914年、結婚記念日である6月28日にボスニアの首都サラエヴォ郊外でのオーストリア陸軍大演習にあたり、夫婦で閲兵式に出席することにしたのだ。陸軍の演習場での皇太子妃扱いは実現したようだが、サラエヴォの町での警備は、テロリストの存在が明らかであったにもかかわらず、皇太子夫妻を守るにふさわしい厳重な体制ではなかった。ゾフィーに皇太子妃の称号が与えられていなかったためである。

この日、夫妻がセルビア人学生に拳銃で殺され、それが第一次世界大戦の引き金になった話はあまりにも有名だが、その事件の根底には「シンデレラ」婚があったのだ。短絡的に考えれば、彼女のみならず、多くの人々の悲劇を招く結果となった格差結婚であった。もちろんこれはゾフィーの責任ではなく、むしろフランツ・ヨーゼフ一世が長生きしたため、保守的な国の体質が改められなかった老害こそが本質的な問題だったろうが。

《「逆玉」はむずかしい？》

男性が結婚によって社会的にステップアップする例も、現実的にある。かつて大阪の船場の商家では、使用人のうちで優秀な男性を娘の婿に迎え、

よりビジネスを発展させた。だが世界的には、この婿養子システムは、むしろ例外的な風習ではあろう。

結婚によるステップアップでは、英国マーガレット王女と結婚した平民のカメラマン、アームストロング・ジョーンズが、伯爵位を与えられ、スノードン卿となった例が有名である。ただし、マーガレットは結婚前の恋人で離婚経験のあるタウンゼント大佐への気持ちが捨てきれず、スノードン卿は王族の側近たちからあからさまな嫌がらせを受け、王位継承権のある妻の数歩後を歩かされるなど屈辱の日々を送らねばならずアルコール依存症になり、結局は2人とも不倫に走って離婚した。

おそらく、彼女の周囲の者たちは、王族でも貴族でもない男性が、王女との結婚により伯爵になったことが許せなかったのではあるまいか。この状況を知っていたためであろうか、アン王女は、夫の授爵を辞退した。従って、彼女の2人の子供は貴族の称号を持たないが、王位継承権はある。

時代は遡って、ヴィクトリア女王配、アルバートはザクセン・コブルク・ゴータ家の王子でヴィクトリアの母の兄の次男だから、血筋で考えれば「逆玉」とも言い難いが、実は母親の不倫相手の子供との噂がある。それはともかく、やはり大英帝国女王の地位に妻がいるのは、精神的にも実際的にも大変だっただろう。彼は42歳で亡くなり、誕生年が同じの女王は82歳で亡くなった。

戦前の日本の宮家では、天皇の娘が皇族と結婚することになっていたため、明治天皇の4人の娘のうち一人は既存の宮家に嫁げたが、あとの3人のために3宮家が新設された。幸運にも北白川宮能久の妾腹の男子・恒久が竹田宮となり、昌子内親王と結婚した。宮家の男子に生まれても、皇族でいられるわけではない。事実、恒久の弟たちはやはり天皇の娘・房子内親王との結婚により北白川宮を継ぐことになる正妻の長男・成久以外、爵位を賜って華族になっている。

そもそも明治初期に皇室と仏教寺院との縁を断つため、岩倉具視によって還俗させられた皇子たちは1代限りの宮となった。北白川宮智成もその一人である。だが特旨により、夭逝した智成の後継に能久が選ばれ、2代限りの宮に改められた。従って、本来、3代めとなる成久は北白川宮を

継げないのが、房子との結婚のおかげで皇族に留まれたのである。恒久も当然ながら、昌子の結婚相手でなければ竹田宮などになれたはずがない。つまりは「逆玉」の好例といえよう。

さて、「シンデレラ」も格差婚によって、習慣の違いや周囲の嫌がらせなどに悩むことになるだろうが、まだ女性の方が異なった環境に対する適応能力に優れているのではあるまいか。そもそも、ふつうの「結婚」にしても、最近までは西洋では、そして今でも日本では改姓を強要され、結婚相手のライフスタイルに合わさなければならないことが多かった。だが、その結婚相手の社会的地位が、すなわち自分の地位になるので、結婚による一発逆転が可能だったのだ。つい最近まで女性の社会進出が限られ、自力での社会的地位の確保が難しく、結婚こそが、自分の地位を高めてくれるかもしれなかったのだ。

けれども、男性は、自分の力で、立身出世の王道を進めばよいではないか。なにも結婚相手に頼る必要などあるまい。そもそも男性中心社会において、「逆玉」男性は、妬みも買って、決して尊敬されまい。なるほど、高貴な生まれでない男が、その働きによって姫と結婚する昔話は少なくない。日本では『一寸法師』、西洋では『長靴を履いた猫』などが挙げられよう。

ただし、これらの場合、男たちは結婚に頼ったわけではなく、むしろ姫との縁談は、厚労へのご褒美である。単なる美男子が姫の心を掴んで結婚しただけではないのだ。前述の船場の婿養子にしても、その日頃の働きぶりや才能が長年にわたってチェックされ、主人に認められてこそその結果であり、「シンデレラボーイ」と呼ぶのは気の毒である。

もっとも西洋では、シンデレラに比べ、シンデレラボーイが難しい理由がある。「マイ・フェア・レディ」は容易に成り立つが、「マイ・フェア・ジェントルマン」は、まず成り立たない。英語の諺にも、「ジェントルマンを育てるには3代かかるが、レディは環境次第だ」というのがある。ハリウッド映画『プリティ・ウーマン』も「ウーマン」だからこそそのストーリーである。

日本と異なり、男性が女性をリードし、エスコートする場面が多い欧米では、男性が能動的に振舞わねばならない。女性は受け身なので、リード

されるままに動けば良い。社交ダンスにおいてもそうだが、女性は超初心者でも踊れるのに対し、男性は女性の3～10倍のレッスンが必要になる。

ましてやレストランでのメニュー、ワインの選び方、オペラなど音楽や美術、文学の知識が紳士の教養であり、さらにはフェンシングなどのスポーツをたしなみ、そしてもちろんこれらをサポートする経済力が必要となる。舞踏会に行くまで、シンデレラはたいしてダンスのレッスンを受けたとは思えないが、それでも王子と踊れたのは、彼のリードが上手かったからで、ダンス超初心者男性がいきなり姫をリードすることなどできないのだ。

《女性家庭教師の夢》

かつて西洋で結婚できない女性のなかには、持参金が用意できない経済状態の中産階級の娘が多くいた。牧師や教師の娘たちで、教育は受けていたので、女性家庭教師(governess)になり自立の道を選んだ。雇い主の家に住み込んで、子供達に勉強を教えるだけでなく、身の回りの世話や子供の服作りはもちろん、他の裁縫仕事までさせられたようだ。

サッカレー著『虚栄の市』のヒロインで野心的なベッキー・シャープは、雇い主の家族との結婚によって衰れた境遇から抜け出そうとする。シャーロット・ブロンテ著『ジェーン・エア』のヒロインも、結局は元雇い主・エドワード・ロチェスターとの結婚を果たす。これらは、当時の女性家庭教師たちにとっては、まさに「シンデレラ」物語だったのだ。ただし、ジェーンの場合は、叔父のジョンから2万ポンド（現代日本の貨幣価値では2億円以上？）の遺産を受け、経済的には邸宅を焼失した元雇い主とは対等関係になれたというのが結婚のハードルを下げたとも考えられる。魔法使いのお婆さんの代わりに、思いがけない財産相続という事態が起こったのだ。

20世紀にも、女性家庭教師の「シンデレラ」物語が大ヒットする。『サウンド・オヴ・ミュージック』である。ハンサムで裕福なフォン・トラップ大佐とのロマンスは地味な修道女になりかけていた娘にとって夢の実現であり、花嫁になった気分はまさに「シンデレラ」だったはずだ。日本で

は『華麗なる一族』の万俵家の家庭教師・高須相子が、当主・大介との結婚を妄想したに違いないが、叶えられず追い出される。西洋の多くの女性家庭教師についても、こちらの方が、現実的な話であった。

《変形シンデレラあれこれ》

「シンデレラ」は格差結婚物語ではあるが、かならずしも「結婚」という形を取らず、しかもランク上の男性との結びつきによって栄耀栄華を手に入れる場合も、ある種の「シンデレラ」といえるのではあるまいか。たとえば次のような事例が挙げられよう。

1. ロイヤルミストレス

日本では側室でありながら、天皇や将軍の生母となった女性。大正天皇の生母の名「愛子」は読み方は異なるが、現代の皇太子の長女につけられた。またエドワード7世の愛人で人妻のアリス・ケッペルは、フランスでは王妃待遇でもてなされた。現代の英国皇太子の妻・カミラにとって、このアリスは曾祖母に当たる。

2. ロイヤルミストレスを狙ったが、大誤算で公爵夫人

エドワード8世が結婚のために王位を退いたのは英国王室始まって以来の大スキャンダルだったが、相手のシンプソン夫人は、元英国王の妻の座よりも、人妻のまま、英国王の愛人の立場を望んでいたらしい。アリス・ケッペルのような存在になりたかったのだ。だが20世紀の半ばはもうロイヤルミストレスの時代ではなかったのだろう。結局、彼女は離婚してエドワードと結婚し、ウィンザー公爵夫人となる。結婚祝いはヒットラーからもムッソリーニからも贈られた。2度離婚歴のある中年アメリカ女性としては十分に「玉の輿」とは思われるが、いかがだろうか。

3. 「うたかたの恋」

前述のオーストリア皇太子ルドルフと男爵令嬢マリーとが、1889年、

心中した。もし、あの世を信じるなら、「永遠に皇太子と結ばれる」という意味を込めての心中は、彼女にとっては「シンデレラ」の成就だっただろう。どうせ、ルドルフの結婚は認められないし、たとえ認められても、男爵令嬢との「貴賤結婚」では皇太子妃になれず、また、これほどのスキャンダルの後では他の男性との縁談も難しかろう。修道院に閉じ込められるくらいなら、皇太子と死ぬほうがいいと、当時の貴族の娘なら考えかねまい。

この世で結ばれないなら、あの世でと、心中した男女の中には、身分格差問題を抱えていた者も、少なくないだろう。心中によってその問題が解消され、あの世で結ばれると信じるなら、それは変形「シンデレラ」物語とみなし得るのではあるまいか。

《今後の展望》

20世紀の後半になると、女性も社会で働くのが当たり前になり、社長秘書が雇用者に愛されて社長夫人になるといった類の働く女性の「シンデレラ」物語がより好まれるようになったのではあるまいか。その代表がアメリカABCが1981～89年まで放映した連続ドラマ『ダイナスティ』である。1回50分の番組に100万ドルの制作費をかけたといわれるが、アメリカはもちろん日本でもヨーロッパでも大ヒットした。

最近では、韓流ドラマに仕事に頑張る美女のシンデレラストーリーが多いように思われる。いずれにしろ、「家にいる娘」から「働く女性」に「シンデレラ」像が変化している。そして、ときには、結婚よりも仕事を選ぶ結末だったりするのだが、それはそれで女性たちの共感を得られるような物語構成になっているのだ。つまり、我々のライフスタイルが変われば、当然ながら「シンデレラ」も変容するのだ。

もちろんブライダル産業は「結婚」に「シンデレラ」のキーワードをちらつかせて「シンデレラ・フェア」などのイベントを企画してはいるが、いっぽう、結婚などはどちらでもよく、「自己実現」こそが、「シンデレラ」にとって必要とのメッセージを送る業界もある。たとえばたかの友梨主催の

減量によるビューティ・コンテストでも「エステティックシンデレラ大会」と「シンデレラ」の名前が用いられるのだ。

かつての女性は結婚こそが人生の目的であるかのように考えたが、クラレが2009年と2015年に小学入学時と卒業時の子供たちの将来の夢について調査した結果によれば、女子の希望1位は教員、2位が医師、3位がケーキ・パン屋と、かなり現実と向き合っているように感じられる。(ちなみに男子は、スポーツ選手、研究者、医師の順である。)私が神戸女学院中学・高等学部在学中には、医師になるよりも医師との結婚によって、リッチな生活をエンジョイしたいとの希望者が多く、医師になったのは135人中5名だったが、今日では40名が医学部へ進学すると聞く。

私の若い頃は、まだC(キャリア) or C(シンデレラ=結婚)が主流で、この二つのCが叶っても、つぎのC(子供)までは難しかった。しかし時代とともに、本人が望むなら or から and が可能になるように変化してゆくべきだ。現代の女性における格差というのはこのCを欲しいだけ手に入れられるか、という物差しでも計るべきではあるまいか。そしてもちろん、資本主義社会では最も大事なものはキャッシュのCであるという現実を忘れてはいけないのだが。

*本稿は2015年12月12日大阪府立大学女性学研究センター主催の講演会「文学とジェンダー」第1回での「シンデレラ——玉の輿物語を比較文学的に考える」に加筆した論文である。